

第四章 混乱をこえて

1 病舎の跡

私立病院慰廃園は、昭和十七年にその四八年間の長い歴史を終えた。この閉鎖には一言ではいい難い苦労があった。

それを一身に背負ったのは、そのころ好善社の書記兼財務担当であり、慰廃園の主事でもあった藤原鉤次郎である。患者の転園、建物の移築だけではなく、まだ慰廃園をたよって診療にくる患者も多くあった。診断を求めらる者には北里研究所を紹介したり、多磨全生園に行くことを勧めた。慰廃園閉鎖の日に逃げだしてもどってきた患者には、他の療養所に行けるように手続きもした。

この時期に好善社社長であり、慰廃園園長であった和田秀豊は老齢に達し、また、大塚かねも理事ではあった

が、病気がちであった。そのため、なにかも藤原鈞次郎に負うところが多かったのである。昭和十九年二月二十一日に好善社の理事会が開かれるが、その報告原稿のなかで、彼はこの時の気持ちをつぎのように書きしるしている。

滔々トシテ奔流スル時代ノ推移ヨリ本園ノ私設救療事業（私立病院慰廬園）ハ断然国立療養所ニ譲渡スルニ不如ト爰ニ意ヲ決シ遂ニ涙ヲ咽ニ断腸ノ念ヒシテ昨年八月五十年來ノ働キヲ解消シ速クモ一ケ年ヲ経過シ候得共、我等固ヨリ救癩ノ精神ニハ聊カモ変ル所ナキヲ以テ爾后ハ救癩援護事業トシテ引続キ之レヲ施行シ此ノ間ニ於テ實際ニ取扱ヒタルモノ又ハ着手シ候モ刻下戦下ノ制限ヲ受ケ自然着手シ得ザルモノアリト雖モ夢寐ニモ忘レ得ズシテ何レノ日カ完成セザレバ已マザル覚悟ヲ有スル件々等一々開陳奉報告候（後略）

このあと戦時下の苦しい状況の中で、当時行なっていた救護事業の様様と今後実現したい構想を述べている。慰廬園解散後の多磨全生園への働きかけには、伝道に加えて、種々の仕事があった。全生園に移転した患者の中には「全く孤縁ニシテ縁故モナク何方ヨリモイササカノ送金モナキ者」もいて、毎月五円かまたは三円程度の支給をする必要があった。対象者は七名で、四五年間慰廬園にいた患者もあり、彼には、月五円が支給された。その他に、特に栄養不良と認められる患者に、乾燥鶏卵や食欲増進をさせる食料品を送ったりする仕事もあった。それも療養所の迷惑にならないよう配慮しなくてはならなかった。療養所では一人につき当時、一円程度の小遣銭が与えられていた。また作業をさせて賃金を支給したりしていた。好善社の援護事業は、患者間のトラブルの原因にならないよう、高齢者や、作業のできない患者に限って施行された。全生園においても十二月中旬ころ、クリスマスが祝われたので、一般患者にも菓子果物などを寄贈した。患者たちからはよるこばれたが、物資不足のおりから菓子類などの入手には苦心したことであろう。

この他の好善社の救護事業として、退園患者の擁護、未感染児童の養護の問題があった。

慰廃園解消の時、未感染児童の保護は四名であった。その中の一名は警視庁委託患者夫妻の子供で男の子であった。園内で生まれ、すぐに保護所に移して養育したが、当時の国民学校三年で発病。両親はその折、長島愛生園にいたため、すぐに同園に入園させた。しかし、幸いにして早期発見であったので、軽快退園となり、山梨県下の母親の実家にひきとられた。また、他の一人の男児は、父親が慰廃園の患者で、その父親の郷里福井県に残されていたが、父親の願いにより好善社が責任をもち、国民学校八年を卒業後、大森の軍需工場に勤務させることができた。以上の例以外にも、通算すると、男六名、女九名、計一五名の児童の保護に当たった。

救護事業を、藤原鈞次郎を中心として続けながら、一方慰廃園の建物一四棟と、土地二八九一坪余の利用について、いろいろな構想が練られていた。ひとつは、目黒学寮をつくることで、公私各療養所職員の子弟のうち、東京に出て勉強する者のために、これを宿舍として使用させようと計画した。ところが、戦時下の統制きびしく、建築資材もままならぬ状況であったから、開設の予告はしたものの発足には至らなかった。他のひとつの案は、遺跡記念公園である。残された土地の三分の二を処分して事業の資金とし、残りの三分の一を貞明皇后の歌碑（「つれづれの友となりても慰めよ、行くことかたきわれにかわりて」の歌が刻んである）を中心にした庭園としようとするものであった。庭園の中に茶室をつくり、公私立療養所の関係者および、らい事業にたずさわる人たちの集会所とする計画で、この公園の規模は約一〇〇〇坪。緑地公園として一般に公開し、自由に利用してもらうつもりであった。しかし戦況は緊迫化し、一〇〇〇坪の土地は東京都空地利用協会に無償で貸与され、食糧増産のため隣接の隣組、約五〇戸余の人びとが利用することになった。かつて、らい患者が在園していた当時は、その方向から飛んでくる蠅一匹にも嫌悪の情を示した人びとが、この時にはそれをまったく忘れたように、建物

にも入り、土地も耕したのである。

その後、好善社には、藤原鉤次郎を助けるため、宮部力、佐竹藤太郎、北林巳之助の三人が入社している。

この三人は藤原鉤次郎が、かつて、上野・亀島両ミツションで伝道していたころにその説教をきき、後日、新栄教会で受洗した人たちで、戦後にかけて、好善社の仕事に大なる協力をした人たちであった。

昭和二十年（一九四五年）五月二十五日夜の東京大空襲は、慰糜園あとも親子焼夷弾の雨を降らせ、礼拝堂をはじめ、診療所、婦人病棟（罹災者数家族が入居していた）などを焼きつくした。重要書類を保管していた宮内省恩賜館にも落下したが、不発のため焼失をまぬがれたことは幸いであった。

藤原鉤次郎は、文京区の借家を昭和二十年一月の空襲で焼失、五月二十五日に世田谷区の中原でも罹災した。

そのため、旧慰糜園内に焼け残った舎宅（大塚かねが住んでいた）に引っ越したのである。荷物といってもわずかな身の回りのものだけであったが、その中に一つの緑の箱があった。これは、好善社創立以来の記録を納めた書類箱で、さきの二か所の罹災の中を持ち運ばれ、無事に今日まで保存されたのである。

昭和二十年八月十五日の終戦の日からの混乱により、藤原鉤次郎日記も八月十五日以降、十一月二十四日頃までは、メモ程度のものしか残っていない。書かれていないことで、かえってその混乱ぶりが想像できる。

しかし好善社は、その混乱の中から、早くも立ち直り、同年十月に総会が開かれる。その記録が残っているので、ここに大略を紹介する。

（前略）大東亜戦ト称ジテ三年八ヶ月 若シソレ日支事変ヨリ通算セバ洵ニ九ヶ年 遂ヒニ戦敗降伏ノ屈辱ヲ余議ナクセラレ 未曾有ノ汚点ヲ歴史ニ塗抹セシニ至リシコト 我等共ニ返ス々々モ痛憤無量ニ堪エザル所デアアル （中略）之レヲ経期トシテ今ヤ俄然一切ノ状相ハ一変セリ 平和占領ノ名ノ許ニ幾十万ノ連合

軍海空ヨリマツカーサー元帥之レヲ率ヒテ占領スル所トナル 爾後刻一刻日一日目眩シキ迄ニ変転窮マル所ヲ知ラズ 従来ノ慣習ハ破壊セラレ民主自由ハ鼓吹サレ足ノ踏ム所ヲ知ラザルニ至ル 素ヨリ慣習ノ打破ハ望ム所ナレドモ 他ニシヒラルムノ余議ナクサルムハ屈辱トモ云フ可キカ

我等又之レヲ契機トシテ自主的ニ従来ノ弊風ヲ一掃シテ 年来持續シタル本事業ニ活力ヲ加ヘ相互ノ験討ヲ攻究シ 洵ニ厚生福祉ノ礎カナル見地ヨリ 嚮者ノ為メ新シキ天地ヲ拓クニ努メ 世ニヨハヒセラレザル彼等ノ幸福招来ヲ希願ス

つづいて、同總會で重要なことが決定されている。そのひとつは、宮部力、後藤勝海より提出された。

本國総務藤原鈞次郎氏ガ本社経営ノ事業ノ為メ多年ノ勞績ニ対シ之レヲ報謝シ園内在来ノ現住居宅及ビ物置ト之ニ添ユル敷地約百坪トヲ永久ニ提供スル件

もうひとつは、藤原鈞次郎が提出したもので、

本園療養事業解消后ノ總會ニ於テ 事務員後藤勝海 塩谷ツネ両氏ノ多年ニ亘ル忠勤ヲ賞シ 後藤氏ニハ在住ノ一棟 塩谷氏ニハ小屋三棟ヲ贈与シタル事ハ 当時已ニ満場之ヲ可決シタル事ハ諸氏ノ知ラルム処ナルガ 今回分譲実行ノ際 後藤氏ヨリ予ヘラレタル建物ノ為メ其敷地五〇坪ヲ買収シ度申出アリ 依テ提出者ハ之レヲ諒シ寧ロ夫レニ適當スル敷地ヲ塩谷氏ニモ無償ニテ添附スル事ヲ宜シトシ茲ニ之レガ賛成ヲ動議セシ次第ナリ

この二つの財産の寄贈によって、元慰痾園の事業は、残務処理の大半が完了したのである。また好善社所有の土地三分の二を、約一五に分割し販売したことも記さなくてはならない。その土地には希望者が続出して、わずか一週間で売約済となった。翌年の總會報告によると、土地分譲十二口、一五〇四坪余売上代金一万八二円七

○ 銭となっている。しかし、この代金は昭和二十一年（一九四六年）二月の金融緊急措置令で、約半分が封鎖されてしまった。

藤原鈎次郎宅が焼失をまぬがれたことにより、その後、上京の全国療養所の園長や職員が宿泊所として利用するようになった。それは昭和二十年十一月七日に星塚敬愛園園長の塩沼英之助が宿泊したことに始まる。焼野原と化した東京には手ごろの宿がなかったため、この宿泊便宜提供は各療養所から重宝がられた。国立療養所、長島愛生園園長の光田健輔や井上謙、大島青松園園長の野島泰治は、藤原宅にかける負担について気を使った。宿泊者は実費を支払うようにしたり、各療養所から、食器や、寝具を貸与するようにしたり、年末には藤原と手伝いをしていた塩谷ツネに謝金を贈るなどの配慮をしたのであった。また当時、空室の多い家屋には、住居に不自由している人々を強制的に入居させる措置がとられていたので、厚生省の担当者からの提案で、藤原宅を「全国らい療養所東京出張所」とすることになった。そして、昭和二十三年十月一日付けで、国立療養所東京出張所設置の証明書が厚生省医務局名で作成された。

昭和二十八年になって、宿舍としてあまりにも頻繁に利用され、家族の迷惑もあることから、光田健輔の申出で、六坪余りの離れ座敷が増築された。その費用は各療養所が分担し、約四三万円であった。しかし、藤原の私宅が公金で増築されたのであるから、所有権をめぐって問題が起こらないとも限らないので、光田園長並びに愛生園の井上謙部長よりの書面によって、藤原へのお礼の意味であることが明らかにされた。しかし、このことは、昭和三十一年に、藤原が、宿泊便宜提供中止を申し出た際、長島愛生園との誤解の火種になるのである。

このように問題をはらんではいえ、当時の好善社にとって、昭和二十年より三十一年までの十一年間、藤原家の私的な努力に支えられて続けられた宿泊提供は、大きな意味を持っていた。それは、好善社と、国立療

養所の園長や職員との家族的な交わりが生まれたことである。この交わりがあったからこそ、その後の各療養所への伝道、教会堂の建設などの事業が、スムーズに実現し得たのである。

2 大塚かねと和田秀豊

好善社が土地問題、住居問題等、数々の難問を抱えていた時、好善社にとって大切な人物が二人死去している。そのひとりとは、慰廃園創立より約五〇年間、夫大塚正心と共に献身的な働きをしてきた大塚かねである。彼女は昭和二十一年四月十一日午後三時に九一歳で永眠した。また同年七月二十七日午後二時、好善社社長和田秀豊も九三歳の高齢をもって逝った。和田秀豊は明治二十六年三月十一日に社長に就任して以来、実に五四年間もその職を務めたことになる。この二人の死去は、好善社の一つの時代の終わりを告げるものであった。二人の生前をしのぶことは、同時に好善社の歴史をひもとくことにもなる。

大塚かねは昭和十三年（一九三八年）、大病に罹った際、「東京日日新聞」九月十五日の朝刊に次のように報じられた。

皇太后陛下御仁慈 大塚かね子女史に御見舞品。皇太后陛下には長くも目黒慰廃園々主大塚かね子女史の重態を聞召され、去る十三日御見舞品を下賜遊ばされた。

その時、すでにいざという時のために、厚生省からの求めに応じて藤原鈎次郎の綴った彼女の履歴書あるいは事績書がある。これらを要約してみると次の如くである。

大塚かねが福島城内ニ生レタノハ安政二年江戸大地震ノ約八ヶ月程前デ已ニ世ハ徳川幕府ノ瓦解ニ近ヅキツ、諸藩共ニ動搖ノ折際デアツタ。藩主板倉主膳正モ国替ヘトナリ其ノ家臣タル父ハ一家ヲ携ヘ共ニ移動スルノ場合デ時ニかね女ガ未ダ七ツ八ツノ頃兵火ノ巷ヲ逃レル途上ニ首刎ネラレル者槍ニ突カレル者アルハ切腹スル武士ナドヲ目前ニ見テ生立チタル環境コソ彼女ヲ育成シタル多クノ節デアルヤウニ思フ。然ルカラニかね子ガ幾多ノ難境苦地ニ立ツモ悠容トシテ物ニ動ゼヌ態度ハ之等ノ経験ト宗教的信仰ノ訓練ニ抛ルノデアル事ヲ疑ハナイ

明治廿七年大塚夫妻ハ多年ノ宿志デアツタ救癩事業ノ端緒ニ結バレ、サテハ従来ノ伝道地ヲ引上東京ニ焔ヘリテ全年好善社ニ入社ツ今日ノ事業地ナル当時ハ櫛林ト畑中ノ一隅ニ居ヲ占メ挺身之レニ投ズルヲ誓ヒ、蠱キノ婦人癩患者（註・津島八重）ヲ収容シ救護スルニ至ツタガ、之レガ為メニハ予テ期シタル事ナガラ息淳（八才）ヲ手離シテ之レヲ他ニ托シ自分等ハ癩者ト居住又浴槽迄モ共ニスル等コレ等ノ苦衷ハ到底余人ノ察知スル事ハ不可能デアラフ

爾來患者ノ数ガ次第ニ増加シ來タルヤ往々本病者ニハ通有トモ云フベキ、偏執、陰險、甚シキハ凶暴ヲ帶ビタル者ナド混リテアル時ハ脅喝ヲスル等言語ニ絶スル場面ニ出遇ハサレシモ一再ナラズト雖何時モ悠然トシテ之レニ応ジ一層ノ温情ヲ傾ケテ之レニ対所スルヲ以テ、遂ニハ自分等ノ暴状ヲ悔ヒ徳化サル、者多ク故ニ旧交アル国立療養所長ノ如キハ本園ノ事実ヲ認識シテ洵ニ不良患者ノ変圧所ト評サレタノモ敢テ溢辭ノミトモ想ヘナイ

明治四十一年ノ頃、屢々村民（当時ハ目黒村）ヲ代表スル有力ナ村會議員何某等ハ本園立退キノ要求条件ヲ脅喝ニ等シキ態度デ故大塚正心ニ膝詰談判ニ來タノデアルガ、何時モかね子ハ夫ヲ隠シテ自カラ接衝シ今

ハ主人留守ナレバ一応承リオキ適當ニ御挨拶申ベシト之レヲ婦ヘシ其ノ回答ヲ需メニ来ルヤ主人ハ期ク御返答スベシトノ要領ナリト蒞蕪問答ニ対談シ果テハソレ等ノ人々ヲ烟ニ卷キ追ヒカヘサレルノガ常デアツタ期クかね子ハ性来話術ニ長ジ円転骨脱頗ル機智ニ富ミテアル時ハ辛辣ヲ諷刺モ交ヘテ人ノ頤ヲ解クナド在園患者ニ対ヘバ其筆法デ叱言モ云ヒ、慰諭モ与ヘ同情ノ声トモナツテ発露スルノデアル

明治四十三年頃ヨリ大正六、七年頃迄 園内ノ一時救護患者ヲ當時毎月一、二回ツム公立療養所ノ方ヘ送ル場合ニ於テ毎時大抵午前四時頃迄ニ夫等ノ患者ノ支度ヲスルノデアアルガ凡テガ病人ノ事ナレバ各自ノ包帯ヲ取換ヘ途中ノ弁当ナドノ用意怠リナク整ヘ之レヲ目黒駅ノガード下迄送ルヲ常トシタノデアツテ是ハ主トシテ老姉ガ其ノ世話ニアタリ途中粗勿ナキヤウ、アルモノハ斯ル場合ニ屢々逃走スルノデ其ノ送致ガ確カニナル迄ノ苦勞ハ人ノ察知シ得ザル事デアツタ、然シ之レガ大正十年以後療養所ノ方ニ護送自動車ガ出来テ漸ク今日デハ左様ナ心配ガ取除カレタ

明治四十五年頃 ミス、コンウオル、リー、ハ癩治療事業ヲ企図スルノ志シアリテ、實際之レニ身ヲ投ズル準備ノ為メ然モ本園ニ近キ日黒不動堂ノ附近ニ仮寓シ慰廢園ニ実修ヲ請フタノデアアル、ソレデかね子ヨリ癩者ノ取扱方又ハ包帯交換等迄ヲ受得シテ一旦女史ハ本国ニ飯ヘリテ再ビ渡来シ始メテ群馬県草津町ニ聖バールナバ医院ヲ建設スルニ至ツタノデアアル 故ニリー女史ハ大塚老姉ヲ常ニ先生先生ト敬称シタノハ此事ニ依ツテミアル

本事業中夏冬ノ初メハ一番老姉ガ手腕ヲ要スル時デアツタ、夫ハ衣服ノ改替布団ノ手入レ等デ婦人患者中ノ能力アル者ヲ督シテ之レヲ行ヒ又常ニハ裁縫、洗濯、張モノ、補修等ノ指導ニ勵ミテ全ク閑暇ナキ日常ノ生活ヲ送ツタ

本事業ニハ又人知レザル所ニ工心ガアリ病者ハ大抵麻痺性ノモノ故指頭ノ無感覺ナルガ数多クソレ故アル者ニハコハセ附ノ足袋ヲ紐ニ改メ、ボタン附ノ肌衣股引セル者ニハ団子ノ串ヤウノ先キニ糸モテ輪ヲ附ケタル物ヲ拵ヘ之ヲ穴ニサシテ其輪ニボタンヲクビラセ引出シテ、カケサス、襖障子等ハ通常ノ引手ヲ廢シ凡テ



図ノ如キ金具カ木造ノ取手ヲ附ス等以上ハ悉ク老姉ノ考案ニナリタルモノデアル
大正十三年正心ガ将ニ死ニ類スルヤ枕頭ニ在ル老妻ニ懇勸以テ今日迄共ニ善戦シタル其ノ勞苦ノ程ヲ深謝シ自カラ凱旋々々ト叫ンデ從容トシテ瞑目シタ。

夫正心ノ死後かねハ氏ノ事業ヲ継承シテ今日ニ及ビ益々進展ノ途ニ立ツテ居ル。而シテ本園ハ他ノ療養所ト趣キヲ異ニスル所ハ直屬ノ園患者ト浮浪患者ニシテ警視庁ガ行政取締上一時救護ノ者トノ二種ガ在ツテ恰モ二ツノ馬ヲ一ツニ御スルヤウナ訳デ其取扱ヒニ於テ決シテ容易ノ業デハ無イノデアル。然ルヨかね子ハ八十四ノ高齡ニ達スル今日迄善ク之ヲ監督シ善導シ慰諭シテ居ルガ故ニ誠ニ患者ニトリテハ慰糜園ハ彼等ノ為メ単ニ遊場ト云フバカリデナク、楽園デアルガ故ニ自然カネ老ヲ癩者ハ慈母トシテ愛敬シ畜ニ又此処ニ居ル者ノミニ止マラス一度本園ヲ通りテ全国公私ノ療養所ニ散在スル患者ヨリモ同ジ敬称ヲ捧ゲラレテ居ルノデアル。

長島愛生園ノ所長光田氏ハ岡山赴任以來ノ熱望デ生存中一ド同所ヘ老姉ヲ迎ヘタシト際々申越サレルノデアルガ何分高齡ノ事故ニ其ノ厚志ニ從フ機会ヲ迭シテ居タノデアツタガ本人モ老後ノ想出是非一遍行カシテ貰ヒタシトノ事デ昭和十年五月侍女ヲ附シテ之レヲ送ツタノデアル 園長ハ恰モ己ガ母ヲ迎ヘタヤウナ喜ビデ数日間同療養所ノ職員等ト共ニ歓待サレ取分ケ医官ノ人々婦長其他ノ看護婦タチモ破格ナ歡迎ブリデ老女ヲオートバイニ乘ラセ島中隔々マデ案内サレタ事ナドハかね子ノ忘レ得ラレヌ感謝デ折々今更ラノ如クニ語

リ出デムハ喜ンデ居ル次第デアル 其時在國患者モ同様デ殊ニ曾テハ慰廃園ニ居ツタ病者タチハ感極マツテ泣テ之ヲ迎ヘタト云フノハ左モアルベキ次第デアル 若シ老師ガ他ノ療養所ニ行ツタトシテモ同様ナ場面ヲ持ツデアラフ 之レハ老師ガ全国ニ散在スル患者ニ及ボシ居ル徳化ノ報酬トモ言ヘヤウ 了リ

大正十五年十一月に発行された雑誌「社会事業」第一〇巻第八号の中で、大塚かねが、慰廃園を代表して「私どもの方針」と題した文章を書いているので、この中で最も強調している点だけを摘記しておく。

此委託患者中には当時浮浪者が多く、中には自暴自棄に陥り如何にも手の付けやうもない厄介者も尠くなかつたので可成手数（かず）の掛つた事もございましたが「柔能く強を制す」とか、斯様な者には又彼等の心事を察してやり愛と親切とを以て労はり且つ慰め飽く迄同情者となつて訓し戒めますならば、その堅い心も自然に碎かれ、遂には温良な人ともなり、又中には信仰の道に入るなぞ全く其の性行が一変致した者もございませう。愛ほど力強い者はないと思いますが、彼等が斯様な荒んだ心になりました原因を察するに、多くは其の環境に余義（あま）なくされた結果であらうと思ひまして誠に気の毒に存じます。肉体の治療もそれは疎かには出来ませんが、一面又斯様な暗黒に閉ざされた彼等の精神界に光明あらしめ靈的に眞の慰安を与へます事は、宗教殊に愛の力に俟たねばならぬ事で、人生の意義から申しまして誠に大切の事と存じます。

和田秀豊についての史料は多くはないが、昭和十四年（一九三九年）自ら「医事公論」に発表した「救贖四五年」がある。昭和十七年（一九四二年）にも、履歴が発表されているので、ここに要約してみる。

彼は、安政元年（一八五五年）一月二十四日鹿児島県垂水に生まれ、鹿児島でも最古の小学校、小学第一校を明治二年（一八六九年）卒業すると、都城に新設された県立小学館の教師となり、英語と数学を教えた。そこに三年勤め、明治五年（一八七二年）の秋に県費で英語修業のため上京を命ぜられた。上京すると、三田の慶応義

塾に入学した。粟津高明という先生から英学を学んだが、この先生がある時、和田秀豊を含む五、六人の生徒を呼んで、キリスト教を教え始めた。それは、ちょうどそのころ日本訳になったマタイ伝かマルコ伝の講義だったようである。講義を聞くことが重なるにつれ、いく分かずつキリスト教の教理を理解するようになった。殊に先生が、青年たちのために祈る時、大いに感激するところがあり、次第に自分からも祈るようになった。そのころ、米国から帰ったばかりの松村という海軍将校の紹介で二人の米国宣教師と知り合った。彼らは築地入船町に住み、そこをしばしば訪れるうち、同居していたウィリアムズ（註・C・M・ウィリアムズ主教、立教学院の創立者）に接し、英学もさることながら、キリスト教を特に望んで教わるようになった。そして明治七年（一八七四年）六月二十八日に、ウィリアムズより洗礼を受け、キリスト教信者となった。ウィリアムズは、明治九年（一八七六年）春、帰郷するに際し、

「和田さん、あなたは決して戦争に出ますな。腕力の戦をして二十人や三十人の敵をたおしたとて少しも讀むべき事ではありません。あなたは貴き戦をなすべきです。イエスのために十字架の戦をたたかって世人を救うことに務むべきです。」

と懇切な忠告を与えた。そして祈りをもって別れた。その後、しばらくたってから西南戦争がおこったが、和田秀豊は、ウィリアムズの忠告を守って戦争に参加しなかった。鹿児島女子師範学校の「訓導」の職を得た後、明治十年（一八七七年）九月より約一年間、陸軍省に勤めた。明治十二年九月よりは海軍省御用掛として、海軍兵学校で三年ほど英学と数学を教えた。この間キリスト教の教師となるべく、宣教師ワデル（スコットランド長老教会派遣の宣教師、後好善社社員）のもとで神学を学んだ。明治十三年（一八八〇年）日本基督教会の会中に伝道者となることを出願し、その試験に合格したので、明治十五年十一月に海軍兵学校教官を辞職して翌年牧師と

なった。実際の牧会は、明治十七年（一八八四年）芝教会からで、明治二十二年（一八八九年）大阪北教会に転じ、さらに明治二十四年（一八九一年）再び芝教会にもどった。そのころ芝教会に出席していたのが津島八重で、この人を世話することから好善社の慰糜園経営が始まったのである。和田秀豊の好善社入社は明治二十四年で、明治二十六年（一八九三年）三月十一日、社長になる。好善社以外の仕事としては、東京同愛盲学校校長及び校長、結核患者療養所「いこいの園」理事長等、社会事業関係の貢献は大きい。和田秀豊は、折に触れて短歌を詠んだようであり、現存する数首に彼の人物が現われているので次に紹介する。

おひたゝぬ園の小草もみめぐみの

露に花咲く時はきにけり

（昭和十年貞明皇太后の御歌が世に出たころ、それに関連して詠んだもの）

吹きすさぶ風に向ひてくだけずば

浪に花咲くときやなからむ

ふる雪のつもればつもるままにして

なびく竹こそゆかしかりけれ

（以上二首は明治学院大学教授平林武雄にあてたもの）

あまつ神に祈らぬ身こそなかりけれ

君がすこやかにいさむことを

（これは、晩年、藤原鈎次郎にあて送られたもの）

3 物資欠乏の時代に

昭和二十一年十一月二十四日の総会で、藤原鈞次郎が、和田秀豊亡きあとの好善社理事長に推挙された。その時彼は七五歳の高齢だったので、新しい時代に対応できる適当な人と固辞したのであったが、当時の好善社を背負って立てる人物は彼しかなかった。

藤原鈞次郎は、当時の交通網の混乱の中を東奔西走、全国の療養所の訪問伝道を開始していた。昭和二十一年十月二十四日より十一月八日までの間、愛生、光明、青松の瀬戸内海の三つの国立療養所と、熊本の恵楓園やその未感染児童保育所を訪問、さらにハンナ・リデルの墓に詣でたり、市内の私立待労病院にもでかけている。翌二十二年六月には十日余りをかけて、宮城県の東北新生園（国立）、青森の松丘保養園（国立）を訪問、途中、らしい予防宣伝や患者の家庭を訪問するなど、精力的な旅行を続けた。各園ではキリスト者と共に祈り、子供たちにも好んで話しかけた。塩谷つね、あるいは後藤勝海につきそわれながら、伝道活動が続けられたのは、らいを病む人びとに対する愛情があったからではないだろうか。この訪問を通して、直接療養者や職員に会い、今、彼らがなにを必要としているかを目で見、肌で触れ、それに対し、好善社がなにを彼らに援助できるのかを考えていった。まさに、療養所と好善社とを結ぶ重要なパイプの役割を果たしたと言える。この間安旅行は彼の健康のゆるすかぎり毎年のように実施された。この彼の執拗なまでの活動は、現在の好善社のなかに、そのまま受け継がれている。

藤原鈞次郎が問安活動を始めた時、戦争のため帰国していた宣教師H・D・ハナフォード（口絵^⑬）が来日した。早速、ハナフォードは昭和二十二年の好善社総会に出席し、再会を喜ぶと共に、好善社の活動に協力する旨の次のような挨拶をした。

「久方振りに諸君に会うのはまことに嬉しい。戦時中、離れていても始終、忘れたことがなかった。日本に在る諸君のことをふと想い教会で祈ったこともあった。それは互いに同じ信仰を保有していたためである。」

このハナフォードに対して、藤原鈞次郎が米国救済協会（以後ALMと略す）との復交に尽力するように依頼したのはいうまでもない。ここにおいて、好善社の活動も新展開を見せはじめるのである。

ハナフォードは一九七三年に亡くなっているが、ここで彼をしのんでそのエピソードや略歴を記しておく。父は英国から移って米人となった人であり、彼ははじめアメリカ長老教会の宣教師となる。その後レバノンのシリア・プロテスタント大学教授を経て、大正四年（一九一五年）来日、京都、三重地方などに伝道、大正十年、上京して明治学院教授となり、理事オルトマンズが死去した後、その席を埋めた。また、すぐれたオルガニストで戦前、戦後の邦語讚美歌改訂委員であった。日米開戦の一年ほど前から、異様に緊迫した空気があったので、彼は帰国を勧められたが、一向に腰を上げず、ついに開戦となり、田園調布の外人収容所に入れられた。夫人を家に残し、監禁されて外界との接触を断たれたことは、さぞ心外であったろう。やがて、最後の交換船で米国に送還されたが、夫人が積極的平和主義者だったことが官憲の知るところとなり、そのため夫妻は米国でもスパイ扱いをされ、上陸後三日間しつこい取り調べを受けた。疑いが晴れてからの夫妻は、米国の日本人収容所の世話に東奔西走する。終戦後二年たたないうちに来日し、夫妻で明治学院の教壇に立ったのである。

ハナフォードを渉外係として、昭和二十三年（一九四八年）はALMとの復交の年となった。それ以前、ララ、

ケア物資（後述）の補給もあったが、そのころ、各療養所では、包帯などが極度に不足していた。好善社は、ALMに対してこの包帯の材料の古木綿や、古シーツを集めてほしいと要求した。これにこたえてALMは、ララとの連携でこれらの品物を送ってきた。患者たちにとって最も必要な贈り物であったことは言うまでもない。また、クリスマスプレゼントも配慮され、宣教師ミス・モーク（孤児の施設、愛泉寮の仕事に従事していた）は、子供たちのために、米国福音教会に働きかけ、多くの絵本、おもちゃを好善社へ送らせた。

ここでララ、ケア物資の説明をしておこう。ララ物資とはアジア救済連盟 (Licensed Agency for Relief of Asia) のことで略してLARAである。アメリカのフレンド奉仕委員会、教会世界奉仕団、米国救世軍など社会事業、宗教、労働の一三団体で組織され、第二次世界大戦後のアジアの生活困窮者に救済の手をさしのべようとするものであった。バター、ジャム、かんづめ、米、小麦粉、衣服、靴などを人種、宗教、国籍の別を問わずに送っていた。また時を同じくして、ケア CARE (Cooperation for American Remittances to Europe, Inc.ヨーロッパ向けアメリカ救済団体) からも食糧品や衣料がとどけられた。この団体もアメリカの宗教慈善団体によって組織されたもので、日本にも適用され、ララ物資と共に戦後の日本社会の困窮を助けた。ララ、ケア物資とも最初の内は好善社にとどけられたが、宣教師たちの連絡仲介によって、直接、的確に療養者の手もとへ送られるように改められ、昭和二十六年ころまで続けられた。

ALMとの復交は、具体的には物資援助から始まって、戦前の援助金にまで回復されていくのである。昭和二十三年七月三日の好善社総会で、

救瀨事業ノ為MTL(註・ALM)ハ戦前ノ関係ニ戻シテ本団事業(註・当社)ヲ応援サン度事 日本ニ於ケル国立 私立ノ療養所ノ内実ヲ識ルニハ本団ニ優ル所他ニナキ事ヲ信ズルガ故ナリ

との動議が出され、全会一致可決した。これに対し、ALMも「好善社との関係は今までの友好関係に変化はない」との返事をしてきたのであった。援助は最初、クリスマスギフトなどの現物支給であった。送金にあらためられたのは、昭和二十七年か八年のことである。日本の経済も立ち直りはじめ、物資が生まれつつある実状を知ったALMは、現物ではなく現金を二〇〇〇ドルから三〇〇〇ドル送ってくるようになったのである。好善社では、その資金で品物を購入し、国立療養所内の新教系キリスト教会（会員及び求道者）と私立の療養所、児童養護施設に贈った。ここに、昭和三十二年十一月のギフト購入配布の案をみてみよう。

ギフト購入配布に関する予算案は大略左の通りとし残額は国立療養所の一般入所者並に職員宛ギフト購入費等とするが、別途立案するものとする。

収入の部

アメリカカンレポーゼミッション送金クリスマスギフト購入費 一、〇七六、四〇〇円

支出の部

国立療養所内教会受洗者宛ギフト購入費（一名当り、四五〇円、一四六四名分） 六五八、八〇〇円

全、求道者（一名当り二〇〇円、五三三名分） 一〇六、六〇〇円、

私立療養所入所者及び児童養護施設宛ギフト購入費（一名当り二〇〇円、二五一一名分） 五〇、二〇〇円

合計 八一五、六〇〇円

（註） 送料を含まず

この援助は毎年十月、各園に入園者や教会員求道者の数、児童数を問い合わせ、希望をきいて実施された。贈り物は一人一人の手に届けられるものだけに、受けとる人に喜んでもらえるものと細心の注意が払われた。ま

た数が不足しないように気を配らなければならなかった。

昭和三十五年、ALMとしてはこの援助を漸減していく方針であることを通知してきた。そしてこの年、ギフトに関しては一〇〇〇ドルの送金をもって打ちきられた。通算一〇年間で優に一〇〇〇万円を越えたもので、戦後の療養所内の物の不足を思うと、ALMの援助はずしりと重いものであった。

こうした援助はやがて終止符を打つことになる。日本も豊かになってきたからで、ALMの予算漸減は、厳しく好善社にせまってきた。それはひとつには、物質的援助の時代は終わったことを告げるもので、もうひとつには、ALMは復興した日本ではなく、他の開発途上国への援助を強める方針を示して、好善社が日本の教会、キリスト者の援助で自立することを問いかけるものであった。アメリカ依存の姿勢は、当然あらためられるべきことながら、それが現実になると冷徹そのもので、理事会は大いに動揺した。生きるためのものがきというか、なにがなんでも日本国内のキリスト教界にむけて働きかけ、その支援を仰がなければならないところに追いこまれた。

4 教会堂を建てる

話を前にもどすが、全国を問安していた藤原鈎次郎は、物資補給の他に教会堂の建設に熱意を示しはじめていた。療養所内に専用の礼拝堂をもち、自由に祈り集会が守れるようにしたい、この時代にこそ「病友に真の教化と慰安を施し生きがいある生活に導かんものを」と日記にある。好善社は、昭和二十三年三月の総会で、「療養

所に基督教礼拝堂の為めの仮建設物を請求すること」を可決した。しかし、療養所には他の宗教もあり、一宗派であるキリスト教のために特別に建物を用意するわけにはいかない。同年七月三日の総会は、ハナフォード宅で行なわれたが、藤原鈎次郎は、ALMに援助を求め、好善社の力で建てられないものかと提案した。他の社員はこの案を無謀だと言ったが、藤原の熱意に負けて、ハナフォード理事はALMに手紙を書くことを承知した。当時、社員個々の生活さえ満足ではなく、社員たちが所属する教会の会堂さえ、戦災のために失って、再建されていない時だったのである。それを、らい療養所の中に建設したいというのだから、そう思われたのも無理はない。

しかし、ついに彼の日記に次のことが書かれる日がやってきた。

昭和廿四年六月十八日（土）梅雨空

今朝ハナフォード氏より電話あり、通話の要件はALMより、全生、および愛生の教会堂建築資金を送付することにたりとの返事を入手した。老（註・藤原鈎次郎は自分のことを晩年「老」と表現した）は之を聞き、目頭が熱くなりて感謝々々と連呼したり。ハナフォード氏も同様の様子目に見るようなり。早速に光田先生に通ず。老君の喜び無上。犀川氏（註・現在沖縄愛楽園園長）も即座に長島へ打電の支度を成し、別に一葉の端書に連署して送たり。

ここで一挙に二つの教会堂が建つという事について説明を加える必要がある。はじめ、多磨全生園については内諾を与えられていたのだが、日本の講和が成立していないときで、送金までには時間がかった。それを承知で全生園の建築計画を進めていたのを、藤原宅で光田健輔も知ることになり要請したのである。ここにエピソードがある。かつて、オルトマンズが、愛生園にキリスト教の礼拝堂を建築してはと提案したのに対し、国立療

養所内にキリスト教の教会堂は建てられないと、光田はすげなく断ったいきさつがある。だから、全生園と同時に建築が決まったことを聞いた光田の喜びよりはまた格別であったという。この時のALMの援助額は全生園に三五〇〇ドル、愛生園に一八〇〇ドルで、日本円にして当時約二〇〇万円の金額であった。

このようにして、昭和二十四年（一九四九年）九月全生園に、十二月愛生園にそれぞれ礼拝堂が完成した。この年は多磨全生園が発足してから四〇年に当たり、それは同時に好善社の間安伝道四〇年の実りともいえる記念すべきことがらである（口絵⑩）。

二つの教会堂の建築に引き続いて、各園の教会や、キリスト者の群れから、教会堂の建築要請がだされ、次々と建築されていった。

藤原鈞次郎の祈りは、彼の死後も好善社によって引きつがれ、昭和四十年までに各々の療養所のプロテスタントのキリスト者の群れは礼拝の拠点を与えられ、独自の教会形成が発するるのである。

ひとつひとつの会堂建設にもまた数多くのエピソードがある。ここに全てを紹介することができないのは残念であるが、現在のワーク・キャンプのヒントを与えられた光明園家族教会（註・国立療養所^お久光明園にある日本基督教団に所属している教会）の教会堂建設と最後の奄美和光園谷川教会の建設の経過を紹介しておこう。

光明園家族教会の教会堂は昭和三十四年（一九五九年）十二月十三日に献堂式が行なわれた。案内状につけられた、信者代表の阿部礼治の経過報告には、今までの集会所が、夏暑く、冬寒い建物であったのに、数々の奉仕によって建設された新しい教会は、広さも匹六坪、瀬戸内海の絶景の丘の上に建てられ、気候温順なることはいうまでもなく、多くの物品もおさめられ、これも神の恵み、と強調されている。

この全費用は、三年間にわたるALMとの交渉の末、一一〇万円の援助が与えられ、好善社も六三万円を用意

し、約二〇〇万円の子算で、教会堂建設にのぞんだ。しかし、敷地は決定せず、じりじりとした半年を過ごした。七月五日に、現理事長藤原偉作（藤原鈎次郎の四男で、昭和三十三年二月、鈎次郎の死後、理事長に就任）が教会に出掛けた。その時の気持ちや経過を社員への「報告とお願ひ」（好第一八四号昭和三十四年八月二十六日）のなかで述べている。その要約を次に掲げる。

こうした重大な信仰的決断を望まれる時機に、家族教会の在り方には心強さを感じることが出来ませんでした。そこで種々北林理事と考え祈った末、すべては神様におまかせし、奨励しなければと思いましたが、本当に未熟な私にとって恐らく忘れることの出来ない冒険であり、勇気のいる仕事でした。しかし、私自身が語るのではなく神様がお用いになり、この事をおさせになるのだと信じた時、非常なる力が与えられ、七月五日家族教会の講壇に立つことが出来ました。

その日、建設地は決定した。播磨牧師は七月八日付けで藤原の労をねぎらって、次の手紙をしたためている。聖名を讚美致します。

先日は誠に御多忙な中を、家族教会々堂建設のために御来園下さり、建設用地を決定して下さいまして教会員一同本当に深く感謝して居ります。

一昨日も総会の時に、今日も祈禱会の後、教会員の方々に今日迄の経過を正直に申し上げたのですが、今日建設用地として与えられた土地、それは決して人間が選んだのではなくまさに、主御自身が先生を通して選んで下さったということ、誰が一体、その日までこの地が教会堂建設の用地になるだらうと想像出来たであらうか、このようなことを思う時主御自身が私達の思いや願ひを越えて最善の地を選んで下さったという感を一層強く一同が与えられました。（後略）

敷地は遙かに小豆島を望む断崖と決まった(口絵③)。雑草と松の茂る急斜面、さらにその下に岩盤をひかえた土地に、元氣な人を先頭に目の見えぬ人、手足の不自由な人、老若男女を問わず、困難な整地作業に取りくんだ。ダイナマイトを手にいれるためには、重労働に耐えられない人たちが献金した。そして、それを命がけで運んだのは、当時二八歳の播磨醇である。彼は関西学院大学神学部卒業で、前の年にこの地に渡ってきていた。文字どおり、「兄弟姉妹」が励ましあい、助けあって難工事が続けられた。この作業のなかに、隣りの長島愛生園囀教会の兄弟姉妹の姿もあった。またこのかげには、昭和二十七年に同じように整地のために山を移した、東北新生園の日本新生キリスト教会(口絵④)の信徒たちの、生きた信仰が働いていた。

このように、キリストのからだなる教会の器を完成するために、光明園家族教会の信徒たちは播磨牧師のもとにひとつとなったのである。そして、この炎天下の奉仕は、播磨の母校関西学院の宗教総部の学生に伝えられ、やがて、療養所でのワーク・キャンプの引き金となった。

在美和光園における教会堂建設は、単に最後の教会堂建設というだけでは語れない。なぜならば、好善社が賭けともいふべき、決断の前にたたされたからである。

療養所教会の姿勢に新たな波紋を投げかけた「全国キリスト教代表者会議」が、昭和三十七年(一九六二年)十一月光明園家族教会で開催された。その翌年に、代表者会議に出席した当時の谷川集會(註・現在は日本基督教団名瀬教会和光伝道所)の林会長が「代表者会議で得たことは、初めて兄弟姉妹と顔を合せて祈りを新らたにさせられたことだが、これは第一の喜びであった。私たちはこれまで小グループであるから、教会堂の必要性は感じなかったが、この一月より建築献金を始め二万四千円を積み立てている」と、藤原偉作理事長に語ったところから出発する。このとき藤原は内心非常に驚き、かたくなにもこの言葉をどうしても素直には受けとれなかつ

たようである。なぜならば、谷川集會が十人余りという小グループであること、カトリックの伝道の強いところで、プロテスタントの宣教が可能なのか、療養所再編成論が出ているおりに、この療養所は存続するのか、という疑問がうずまいていたからである。そして、この時は氣運が醸成されるのを祈るだけであつた。

昭和四十年三月、會堂建築の正式な要請狀が好善社に届いた。すでに、他の全療養所には會堂がそなえられ、残されたのはこの奄美だけという事実、代表者會議開催の時より黙々と建築資金を積み立てている事実、仮のものがあったが、定まった集會場を失つた事実、さらに、友園（全国の国立らい療養所を友園と呼んでいる）の諸會會からの熱心な要請、助言、そして祈り……。ここにおよんで、やっと好善社の理事会は、機は熟しつつあることを受けとめた。しかし、なお、大きな問題が好善社内部にもあつた。この問題をのりこえ、決断にふみきつた経過を藤原偉作は、昭和四十年十二月十五日の獻堂式の挨拶で述べている。

すなわち、この数年来ALMからの援助は減少し會堂建築資金は既に打切られている。従つて最後の會堂建築は日本のキリスト教會の支援のもとになされなければならないことであり、それは、これまでの會堂建築の九十パーセントもアメリカの兄弟姉妹の獻金に依存した日本のキリスト者として、当然なされねばならぬ事であり、當社の切なる願ひでもありました。

しかし、現実には、療園伝道の重要性を、また日本人はらい園に負いめがあることを説いてまわつても、キリスト教會でさえ自己の肉体の痛みとして受けとめてくれない。数年来の事業活動——募金高に見合ふ活動を進めてきたために、資金もすっかり底をついてしまった。果して昭和四十年度を乗りきれぬだろうか、今年初頭の總會では数年計画で実施したほうが、という意見もありましたが、審議の結果は、時の熟したこの一年に賭けることに決定し、本年度事業の第一に奄美の會堂建設を掲げました。

それは私共なりのきびしさです。このままでゆけば本年度の事業資金はなくなってしまふ。聖書学舎の運営費も、友園教会への働きかけの資金も、また当社自身の支えられることにも窮してしまふ。しかし、それは人間の計算としてのことであるが、やはり聖書には「神の国と神の義とを……」と記されているではないか、来年の聖書学舎が、友園教会が、好善社がどうなるというのではなく、いつに賭けて谷川集会がいま信仰にしっかりと立つか立たぬかが、即ち、主の御業が、宣教がこの地に進められるか否か、「汝らもし主に在りて堅く立たば我らは生くるなり。」テサロニケ人への第一の手紙第三章八——この聖言にかかっているのであって、その成就こそが、みなさまを注視している全友園のキリスト者を、好善社を生かしめる途であると信じます。

「奄美のらい園の教会堂をあなたの献金で一というよびかけで、広報と募金活動を行ない、一八〇万円の建築資金を集めるために好善社は奔走したのである。

このように奄美の教会堂建設の決断は、ALM依存の姿勢から完全に脱皮して、日本の教会の支援をうけて立つ姿勢を生み、好善社を新たに生かしめる途となったのである（口絵②）。

5 恵光寮は実らず

しかし、教会堂建設のように成功した例ばかりではなかった。昭和二十八年夏、元慰廢園あとに設けられた恵光寮（未感染児童養護施設）はその実らなかつた例である。藤原鈞次郎はかねてより、好善社として元慰廢園跡

に記念事業を起こす構想を持っていた。それは未感染児童の養護施設と療養所職員の子弟の学寮、職員宿泊所として遺跡記念公園などであった。

一方、光田健輔長島愛生園園長などのらい事業関係者は、戦争のために、次々と閉鎖されていった私立のらい病院を惜しみ、日本のらい事業の先導となったリデルやリーの業績を記念したいと考えていた。そこで財団法人頼子防協会（昭和二十七年に財団法人藤楓協会となる）の事業として、私立聖バルナバ病院（群馬県草津）は楓公園とし、記念碑を建立して草津町に管理させた。また、熊本の回春病院跡には、藤楓協会の手によって、リデル・ライト記念養老院が建てられた。

慰廃園跡だけが記念事業としては出おかれていた。戦後すぐ、藤原鈞次郎は私宅を職員の宿泊所としていたが、光田健輔はじめ療養所園長らは、それを記念事業とみなし、それに、記念館などを附随させて、藤楓協会に慰廃園記念事業をするように要請し、好善社に対しては所有する土地、建物一切を藤楓協会に移譲し、現地の経営を藤原が行なうという方法を提案した。しかし、やがて協会側の意向と好善社の意図とはくいちがうことが分かってきた。好善社としてはあくまでも自分たちが管理し、らい事業、それも直接らいを病む人たちのために使用したいと願ったのである。それ故、好善社は、協会側の提案を受け入れず、話し合いは決裂した。

この決裂の後、長島愛生園側から次のような提案があった。

「慰廃園記念事業は公益法人を設立して行うこと。記念事業として保育児童の養護及び職員子弟の寄宿舎の経営をする。そのために、好善社は所有の土地、建物を提供し、長島愛生園は養護施設、寄宿舎を建築して提供する。」

好善社はこれを承諾し、恵光寮建設に踏み切った。そして開所式（口絵⑳㉔㉕）が、昭和二十八年七月に行な

われたのである。その後、四年間藤原鈎次郎は楓蔭会の理事となり、家族をあげて運営にあたり、児童の世話を中田かね子保母と元慰廃園職員塩谷つねが行なった。この時、恵光寮の一部は、職員子弟の寄宿舎としても使用されていた。楓蔭会とは、長島愛生園職員幹部をもって組織され、未感染児童の養護施設を設置経営することを目的とした団体である。

事業開始後に、楓蔭会は東京都より児童養護施設として、認可を受けようとした。ところが昭和二十九年（一九五四年）熊本にある同じ未感染児童の施設龍田寮では、市民の偏見差別のために黒髪小学校へ通学することが拒否されるという騒ぎがおきていた。その件を知った東京都は、恵光寮を認可しなかったのである。そこで長島愛生園は、養護事業の困難を理由に、その施設を子弟の寄宿舎の経営のみにする旨好善社に申し入れてきた。

この申し入れの前、昭和三十年七月に、藤原鈎次郎は高齢と健康すぐれぬことを理由に、宿泊便宜提供を一時中止することを各療養所に通知していた。すると愛生園側より、固定資産税の肩代わり分の請求や、宿泊施設建築資金の返済などを提示された。

恵光寮が都の認可を受けなかったこと、藤原宅の宿舍提供辞退などの問題がこじれて、好善社と愛生園との間に亀裂が生じた。そしてこのくいちがいがあらたまるのに、約一年間が費されたのである。

好善社は病床の藤原鈎次郎を中心に北林巳之助、宮部力、藤原偉作などの社員が誤解点の解明につとめた。

誤解の基本的な点は、記念事業に対する根本的な考え方の相違であった。長島愛生園にとっては、顕彰のための遺跡保存と療養所職員の宿泊施設、職員子弟の寄宿舎ということで、慰廃園という名前は残すが、事業の経営主体は別法人にする。好善社としては、あくまでもらいを病む人たちに関わる事業をすることによって、慰廃園の記念事業とする。好善社が経営していた慰廃園であるから、その記念事業は、やはり好善社の歴史と精神を軸

として、計画実施されなければならないと考えたのである。

交渉を重ねたすえ、ついに昭和三十二年十一月、宿泊所として藤原宅に増築された建物は、すでに学生寮に転用されていた恵光寮に移築された。そして、楓蔭会との関係も解消されることなどをふくんだ覚書が、財団法人長壽会（長島愛生園職員厚生団体）と好善社の間に交換されてこの問題は解決した。

その後好善社は、慰廃園記念遺跡地を目黒通りに近い場所に設置した。貞明皇后御歌碑と御下賜の楓を移植して小庭園とし、宮内省御下賜の記念館を復元、建設し、遺跡として保存することにした。昭和三十三年十一月のことである。この記念館は再度移築されて、現在、好善社事務所となっている。

6 藤原鉤次郎

これまでの記述の大半に引用された「藤原鉤次郎日記」によっても分かるとおり、好善社の一〇〇年を語る時、彼の名の出ぬことはないであろう。明治二十三年、好善社に入社以来、世の荒波をくぐりぬけ、今日の好善社の土台を築いたのである。その彼が天に召される日が訪れた。昭和三十三年（一九五八年）二月二十八日のことで、午前四時三〇分、永眠した。

葬儀は三月五日に好善社葬として新栄教会で行なわれた。この同じ時刻に多磨全生園の秋津教会で信者たちは、彼をしのんで祈禱会を開いた。

葬儀の折、藤原鉤次郎の働きと信仰について貴山栄牧師（当時、日本基督教団新栄教会牧師で好善社より説教

者として全生園に派遣されていた)が述べた言葉を紹介しよう。

「藤原長老がキリスト教の信者となられたのは十八歳の時であります。明治二十二年に仙台教会で三浦宗三郎牧師から受洗されました。当教会へ転籍されたのは二十五年五月、二十一歳の時で、明治三十二年九月から現在まで六十年間、当教会の長老の職をつとめられました。これは日本ではまず例がなかるうかと思えます。正に『善かつ忠なる僕』であつたといふべきです。故人は明治三十二年以来、亀島および上野ミツシヨンのキリスト教伝道に参加、特に日曜学校教育に尽力されました。その頃、みちびかれた人々の中には、今日なお十数名が教会につながる者として健在であります。この伝道は関東大震災(大正十二年)まで継続されました。また毎日曜日上野公園にて行われていた路傍伝道は、藤原長老によって太平洋戦争直前までつづけられたのであります。これもなかなか真似のできないことであります。明治二十六年十月、救癩事業団体である好善社社員となり、慰癩園のために働かれ、昭和十七年八月、国立多磨全生園に合併移転するまで、四十九年間、癩患者の友となり、伝道および慰安に心をくだかれました。この慰癩園は新栄教会の米国婦人宣教師ヤングマンさんの提唱により、全国に先がけて設立された私立癩病院です。慰癩園の解散後は米国救癩協会(ALM)からの援助金をもらって全国八ヶ所の療養所内に、新教の礼拝堂建設の大きな事業をなさいましたが、この打合せのため、北は青森、南は鹿児島と老軀を運ばれて、その完成につくされました。会堂建築の件について、誰かがALMに手紙を出すと、決まって『東京の藤原に相談するように』との返事でその信用の程も推して知ることができましよう。毎年クリスマスの際に、ALMよりのクリスマスプレゼントを全国の療養所に配分発送する仕事も並大抵のものではなかったでしょう。ことに東村山の多磨全生園秋津教会には毎月応援伝道におもむきましたが、昨年のクリスマスには、健康が思わしくなかったに

もかわらず、これが最後の全生園行きになるかも知れないと無理を押し行かれたのです。これが死期を早めた原因になったかも知れません。しかし、藤原長老にとっては、その一事に実に満足であったことと信じます。教瀬事業と共に今一つ、余り知られていないことですが、藤原長老は孤児の救済運動も行い、たしか大正の末期から約十数年間、ミス・パンフ・アインドと共に、愛泉寮に多くの孤児を収容し、面倒をみるなどよき働きをなされました。藤原長老の人生は必ずしも平坦な、平穩無事のものではありませんでした。

愛児も五人まで失われ、大震災と、戦時中二度も火災にあわれ、家財を失われました。しかし藤原長老は愛誦の聖句『死のかげの谷を歩むとも、わざわいをおそれ、汝われと共にいませばなり。汝の答、なんぢの杖、われを慰む』（詩篇二三篇）の言をもって、自らを慰めるのでした。体が思わしくなく、教会に出られなくなつてからも、朝の祈りは欠かされたことなく、そして教会の人に『私は皆さんのために名をあげて祈っています。二時間はかかりません。しかし、それが、私の今の仕事なのです』と語るのでした。『寿正寝に終る』と中国のことわざのとおり、藤原長老は、親しい方々の厚き看護の中に思い出多い慰廢園跡の自宅で、八十八歳の天寿を完うせられたのです。『私は世を去るべき時は来た。私は戦を立派に戦いぬぎ、走るべき行程を走りつくし、信仰を守り通した』のパウロの言葉は、また藤原長老の一生を語る言葉でありました。
 よう。」

ここに彼の略歴を記しておこう。

明治四年（一八七一年）三月一日、東京生まれ。一〇歳の時、選ばれて明治天皇の雑務をする舎人（よめど）となった。

舎人というのは、一〇歳ぐらいのまだ男女の別がさだかではない者が特に選ばれ、武士の子から優秀な者が選ばれた。養父元親は徳川時代の豪華な生活を維新後も続け、ついに屋敷を売り払うような、どん底の生活になった。

鈎次郎はいたたまれなく、一六、七歳の時に家出して東北に行き、洋服屋の丁稚になったり、北上川の氾濫の折には測量の手伝いをしたり、転々と職を変えて生活をする。一八歳の折、仙台で三浦宗三郎牧師に出会い、その感化によって、キリスト者として洗礼を受けた。一九歳にして養父のもとに戻ると、たまたま、元親は、ヤングマンの亀島ミッシェンを助けて働いていた。こうして、ヤングマンとの出会いがある。前途に種々の望みもあった鈎次郎は、宮中出仕の時、知遇を得た山県有朋をたよって職務につこうとしたが、ヤングマンが、この青年鈎次郎を見込んでなまなかつた。そして、二二歳の折、好善社に入社したのである。入社後、ヤングマンの期待通りの働きをしたことはいうまでもないが、几帳面な性格からか、歴史編纂を考えていたのか、書類の整理保管、個人の日記などの保存をよくした。彼の在ったことは、好善社の歩みを知るうえで幸いなことだったと言えるだろう。

この歴史編纂中にたまたま発見した彼の履歴書があるので掲載しておく。これは藤原鈎次郎が二八歳のおり、東京府知事あてに提出した「宣教届」に添付されたものである。

履歴書

原籍東京市日本橋区亀島町一丁目卅五番地住

東京府土族

亀島ミッシェン管理者藤原鈎次郎

明治四年三月一日生

一東京府日本橋区浜町住亡古賀成章の次男にして明治九年九月制規の手續を経て下谷区仲御徒町住亡藤原元親の養子となる

明治九年初めて小学校に入学す

明治十一年より全十四年迄故大沼枕山の門に漢籍の素読を学ぶ

明治十四年小学校を退校す

明治十四年雇小舎人申付候事

太政官

明治十五年より全十九年迄鳳鳴学舎に於て漢籍の素読を学び傍ら講義を聴く

全年内閣附小舎人被仰付

太政官

明治十五年より全十九年迄金文学舎に於て英文を学ぶ

明治十七年全学舎に於て商法簿記を卒業す

明治十八年依願小舎人差免候事

太政官

明治廿一年北上川測量見習生申付事第二区土木監督署

明治廿二年測量見習生を辞す

全年基督教を信じ仙台東三番町一致教会に於て洗礼を受け信徒となる

明治廿三年帰京 徴兵検査を受け乙種に加へらる

明治廿四年十月より全卅二年六月迄啓蒙日曜学校を教授す

全年中仙台教会より東京築地新栄教会に転会して全教会の信徒となる

明治廿四年より全廿六年迄米国プレスビテリアン、ミッシヨンの宣教師神学博士タムソン氏に就て聖書を研

究す

明治廿五年より全廿六年迄日本基督教々師篠原銀蔵氏に就て聖書を研究す

明治廿五年より本年に至るまで米国プレスビテリアン、ミッションの女教師ケーテ、エム、ヤングマン氏と共に伝道に従事し亀島ミッションの管理者及担当布教者となり上野ミッション亀島ミッション上野公園内荏原郡下目黒村にある慰糜園其他鎌倉等の各所及び自宅他人の邸宅に於て幻燈演説教等に由り広く布教す
明治廿六年好善社に入社して全会々員となる

全年中聖愛会と称する慈善会を組織し今日に至るまで猶其働を勉め居れり

明治卅一年六月より好善社の救済せし子女等を全社の依頼に由り自宅に引取りて其教育を担当す

明治卅一年新栄教会の総会によりて長老の職に撰挙せらる

明治卅二年六月より日本基督新栄青年会に係る月刊の雑誌（新栄）の編輯兼発行者となる

一賞罰共に無之候

右之通に相違無之候也

明治卅二年十月四日 藤原鈞次郎